Osaka University Knowledge Archive

Title	揚琴とその音楽文化の研究
Author(s)	龔, 林
Citation	大阪大学, 2000, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/41993
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

【16】

氏　　名	龔（きょう）　林（りん）
博士の専攻分野の名称	博　士（文　学）
学　位　記　番　号	第　15109　号
学位授与年月日	平成12年3月24日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 文学研究科芸術学専攻
学　位　論　文　名	**揚琴とその音楽文化の研究**
論文審査委員	（主査） 教　授　山口　　修 （副査） 教　授　根岸　一美　　助教授　永田　　靖

論文内容の要旨

本論文は、現代の中国音楽において欠かせない代表的な楽器のひとつである揚琴に焦点をあて、その歴史と現在を文献研究およびフィールドワークの手法によって包括的に究明した研究である。揚琴は、洋琴、敲琴、打琴、胡蝶琴などとも呼ばれ、形態的にも歴史的にもヨーロッパのダルシマーや西アジアのサントゥールと深く関連していて、共通の祖型から発しつつもそれぞれの民族が長い歴史のなかで育むうちに現在見られるような違いをもたらしたものと考えられている。中国の場合、独奏や合奏の器楽のみならず、語り物の伴奏楽器として重宝された経緯をもち、近現代における社会の大きな変動期に楽器の仕組みと奏法が相関的に「改良」され、音楽的表現の可能性を飛躍的に拡大した。本論文は、揚琴に秘められたこのような歴史と現在を秩序立てて論じることにより、中国音楽文化の本質の一端を明らかにしている。

論文の構成は、序論につづく大きな二部がそれぞれ三章、四章に分けられるかたちをとっている。序論では、広い意味での楽器学研究のモデルを提示する意図が述べられ、先行する楽器学理論を援用しつつ、独自の観点から文献研究とフィールドワーク研究が融合されることを明言している。

第1部「揚琴の伝統」は、主として近代以前に展開した揚琴の変容過程を跡づける意図をもって、まず第1章「揚琴の初期史」から説き起こす。すなわち、揚琴の伝来史と伝来当初の経緯を探る作業にくわえて、伝統的揚琴の構造と基本的奏法を記述する。揚琴は、明末・清初の16～17世紀までに陸路ではなく海路によってもたらされた。伝来した「洋琴」は、主として語り物音楽を担うものとして広まり、その伝播の過程で奏法が定式化、符号化していった。第2章「伝統的な民間音楽における揚琴－江南絲竹・広東音楽の場合」では、民間合奏のなかに組み込まれた揚琴に焦点をあてることにより、語り物の場合とは異なる音楽表現がこの楽器に託されてゆく過程をよみとっている。第3章「語り物音楽における揚琴－四川揚琴を例として」では、ふたたび語り物を論じつつも、表演を主導する立場に立つこの楽器の奏者が芸術家として演唱形式やレパートリーを確定したり理論的側面を書き留めることにより、この楽器が中国文化に深く入り込む側面が強調される。

第2部「揚琴の現在」のはじめの2章（第4章「ハードウェアとしての揚琴自体の改良」、第5章「ソフトウェアとしての揚琴奏法の革新」）は、現代の隆盛にいたる近代化の過程を詳細に論じるものである。とくに1949年に中華人民共和国が成立した後の新体制のなかで抜本的な変容を余儀なくされた音楽界一般の動向とみあうかたちで、音域の拡大やペダル付加、左右両手の有効な活用といった工夫が盛り込まれるのである。第6章「現代的な創作音楽にお

ける揚琴」では、もはや西洋音楽の大きな影響は否定しがたくなった状況のもとで、中国的な伝統をも忘れることなく、作曲理論と演奏理論が交差しながら揚琴音楽文化が展開してゆく様子が描かれる。論文をしめくくる第7章「文化触変における中国の楽器」は、文化人類学における異文化接触の捉え方を援用して、多くの個人や団体が近代化の荒波のなかで新様式を獲得してゆく過程が系統的に記述される。

（分量　本文138頁　400字換算約415枚　文献表、資料等34頁）

論文審査の結果の要旨

中国音楽の研究は、従来文献に大きく頼って歴史や理論に偏向する傾向が強かった。その意味では、総合的な楽器学を目標として掲げた本研究が、文献探査はもちろんのことフィールドワークの手法を根幹にすえて成就されたことの意義は大きい。それは激動の社会のなかではあっても、丹念に足を運びさえすればたどりつくことのできる生の資料が豊富に埋もれていることを物語っている。本論文の場合、貴重な写真資料や人間系譜がフィールドワークの成果として有機的に組み込まれており、そうしたフィールドデータを整理して提示した点でも高く評価できる。また、歴史を単純にたどるのではなく、楽器学や文化人類学の概念を意識して、歴史と現在を結ぶ特徴を探り当てていることも特筆に値する。

しかし、本論文には改められるべき短所があることも指摘しなければならない。たとえば、類似の楽器と共有する特徴を比較学的に抽出することがなされていれば、中国独自の展開のあり方がより鮮明に描写できたにちがいない。また、中国が誇る他の多くの楽器がたどった歴史過程と重ね合わせることにより、揚琴に託された中国的音楽性がより説得力をもって読者の感性に訴えるものとなったであろう。もっとも、こうした短所は論者自身気づいていることであり、生涯をかけて継続されるはずの研究により実現される可能性は残されている。総じて、新しい楽器学研究のモデルとなり得るもので、従来の水準をはるかに超えている。よって、本研究科は、本論文を博士（文学）の学位を授与するのに充分な価値を有するものと認定する。